

地域メディアのデザインをつうじた「学び」の実践

「中吊りギャラリー」の試み

慶應義塾大学 環境情報学部 加藤文俊
fk@sfc.keio.ac.jp

1 はじめに

近年、大学と地域との連携を深めながら、「学外」におけるインターンシップやフィールドワーク実習等を試みる事例が報告されるようになった。この背景には、大学の「キャンパス」では体験しえない「現場」感覚こそが重要であるという認識にくわえ、産学官民による共同研究をつうじた、あらたな知的生産の仕組みづくりへの関心の高まりがあると言えるだろう。社会調査や地域福祉等の分野での資格取得と直結しているようなカリキュラム設計の場合には、実習の目的や方法が明快であるという意味で、産学官民の連携を想定したプログラムづくりは、相対的に実現可能性が高いと思われる。また、都市計画や地域開発といった、物理的な設計や計画策定に関わる分野であれば、図面や模型などによる実習の成果物をイメージすることは比較的容易となる。

いっぽう、いわゆる人文・社会科学系の講義・演習を、「学外」で実施しようとする際、その目的や方法を明示することが難しい場合がある。実習をつうじて、何らかの「目に見える」成果が期待される場合には、さらに取り組むべき課題は多くなる。どれほど学生にとって意義深い活動であったとしても、産官民の支援を受けるためには、関わりをもつそれぞれの主体や、地域コミュニティにとっての意味・意義を、明示することが求められるからである。つまり、「学外」における実習環境は、学生たちにとって安全で楽しい「学び」を前提としながら、さらに、外部との連携や継続性、地域コミュニティをはじめとする関与者への成果の還元といった問題をもふくむかたちでデザインすることが重要である。本論文では、筆者が2007年度に実施した「中吊りギャラリー」の試みを事例に、地域コミュニティに密着した学習環境のデザインのあり方について論じる。

2 地域コミュニティにおける実習環境のデザイン

筆者の研究室では、人びとの集う「場所」をテーマに調査・研究をすすめている。とくに、地域コミュニティのなかで創造性に富み、活気のある「場所（グッド・プレイス）」（ハイデン, 2002; Oldenburg, 1997）を成り立たせる要件を、コミュニケーション論の観点から考察している。「場所」は、たんなる物理的な環境ではなく、人と人との相互作用が前提となって生まれる。その意味で、「場所」はコミュニケーションの問題としてアプローチする必要がある。さらに、人びとが「場所」をどう理解するかは、個人的な問題であると同時に、社会的な関係の理解、環境との相互作用の所産として理解されるべきものである。こうした「場所」の問題を考えるために、

フィールドワークを中心的な活動に据えながら、直接体験こそが「学び」の源泉であるという「体験学習」の考え方（たとえば Kolb, 1984）にもとづいて、学習環境やワークショップのデザインをすすめてきた。

「学外」で実習をおこなう際には、下調べは最小限にとどめ、いわゆる「よそ者」の目線で、あたらしい地域の理解を創造するプログラムづくりをおこなっている（加藤, 2006a, 2006b）。フィールドワークに際しては、カメラ付きケータイをはじめとするモバイル機器（GPS, ボイスレコーダー, 歩数計など）を携行し、データ収集をすすめる。モバイル機器をもちいたデータ獲得、加工、編集といった一連の流れを学び、さらにネットワークを介して成果を公開するといった側面は、情報教育や「メディアリテラシー」などの領域における実習として位置づけることもできるだろう。こうした実習を支援するため、外部との連携や成果の還元について、その運用のモデルを検討し、試行した（図1参照）。

2-1 フィールドの選定

フィールドワークの実習課題を設計する際、まずは「現場」の安全性やアクセスの問題を考慮する必要がある。さらに、学生たちの動機づけや進捗管理のためには、ゆるやかな制約を与えることが重要だと言えるだろう。フィールドの選定もふくめ、調査のデザインをすべて学生たちに委ねると、いささかならず散漫になってしまう。逆に、フィールドでのふるまいまでを事細かに決めてしまうと、あたらしい発見や気づきの機会を逸するばかりでなく、学生たちの動機づけにも影響がおよぶ。学生の自律性を活かしながらも、ある程度の一貫性をもったフィールドの理解が可能となるような現場の選定が望ましい。

道路や鉄道は、地域や都市のイメージづくりに少なからぬ影響をあたえている。時には、道路や鉄道が「エッジ」（リンチ, 2007）となって、そのイメージ（イメージ可能性）を分断することもあるが、「場所」に対する親近感やアタッチメント（愛情・愛着）は、おそらく、われわれが考えている以上にバスや電車などの交通機関と関係していると考えられる。なによりも、通勤や通学など、多くの人びとの毎日の「足」として、日常生活にとけ込んでおり、われわれが、毎日ながめている「あたりまえ」の風景は、公共交通機関の路線と無縁ではないはずである。こうした認識にもとづくと、公共交通機関の路線をフィールド選定に役立てることができる。

2-2 データの収集と蓄積

フィールドワークには、フィールドノート（調査日誌）が不可欠である。観察・記録の方法はさまざまなメディアの活用によってつねに変化しており、従来型のメモやスケッチという方法にくわえて、最近では、ウェブ日記やブログを活用して、フィールドノートを綴ることもある。

これまでは、収集された一連のデータを蓄積、参照するための仕組みは、調査者が自分で調達し、メンテナンスまでおこなう必要があった。また、共同研究などの場合には、複数の調査者どうしでデータを共有する必要があり、書式を統一したり、データの保存形式を決めたりするのに、少なからぬエネルギーと時間を投じることになる。だが、ここ数年で身近になった、動画の投稿サイト、写真サイトなどは、フィールドワークのデータベースとして活用することができる。既存の仕組みを使うことができれば便利であるし、多くの人びとと調査の進捗や成果を共有することもできる。

2-3 成果の公開

産学連携という関係性の有無に関わらず、調査者は、成果をまとめ、報告する責任を負う。とりわけ、「学外」における活動の場合には、成果の公開について入念に計画しておくことが望ましい。データ収集のために、歩き回っておきながら、その成果がどこか他の場所で限定的に公開されているようでは、不十分だと言わざるをえない。とくに、調査に際して協力を得た場合には、お礼の意味も含め、研究成果を何らかのかたちで地域に還すことが、フィールドワーカーには求められる。つまり、地域コミュニティは、フィールド調査にかぎらず、成果を公開し、まさに調査対象となった地域に暮らす人びととのコミュニケーションの「場」として位置づけることが

重要なのである。

3 事例：「中吊りギャラリー」の試み

3-1 “湘南”フィールドワーク

上述のモデルにもとづき、2007年4月～6月下旬にかけて、江ノ電15駅（藤沢～鎌倉 34分）、湘南モノレール8駅（大船～湘南江の島 15分）の沿線をフィールドとする調査を実施した。筆者の研究室の学生20名ほどが、学期をつうじて取り組む課題として参画した。江ノ電は海側から、そして湘南モノレールは山側から“湘南”というエリアを際立たせる。どこからどこまでが“湘南”かを規定するものではないが、調査対象となるエリアを、わかりやすく理解することができる。いずれも比較的コンパクトな路線であるため、フィールドワークを継続的にすすめるのに適したスケールだったと言える。

3-2 グループウェアとしての地域ポータル

今回の調査では、当時オープンしたばかりの「湘南Clip」という地域ポータルサイト（湘南密着型ポータル）の活用を試みた。まずは、20名ほどの学生全員とともにユーザー登録をして、毎回のフィールドワークでの所感を綴ったり、写真を載せたりするかたちで使ってみることにした。基本的な機能として、日記（ブログ）とアルバムがあれば、フィールドワークの日誌として活用することができる。大まかなガイドラインとして、3か月ほどの調査期間中（2007年4月～7月初旬）に、少なくとも10本のフィールドノートを書き、写真もできるかぎり載せるように指示した。各自が、フィールドワークに足をはこぶたびに記事が更新されるので、調査の進捗を確認するのにも役立った。

最近の地域ポータルは、SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）の機能を備えていることが

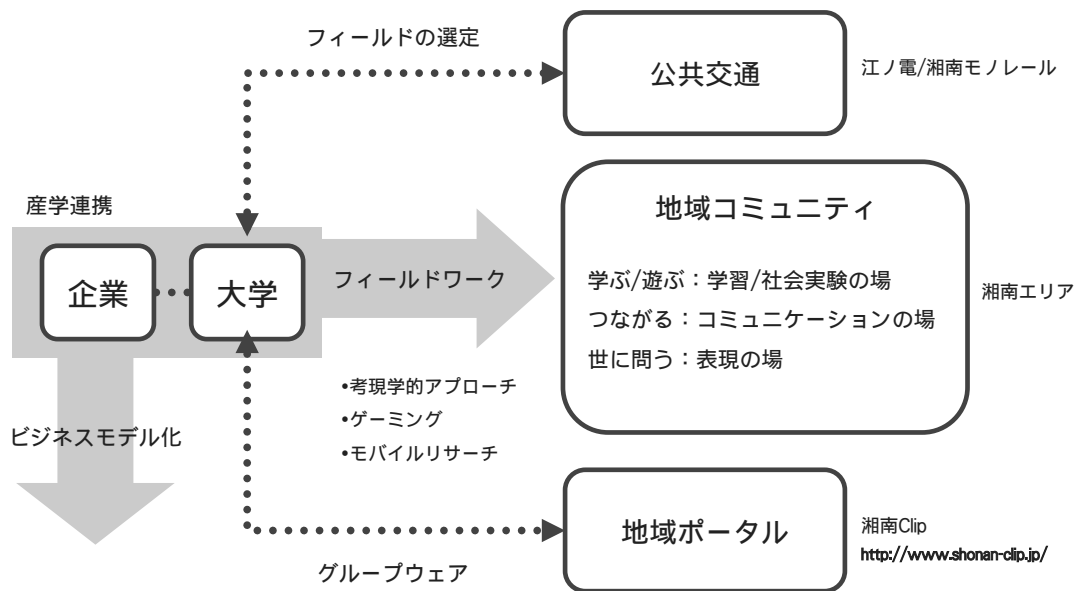


図1 産学連携によるフィールド調査のデザイン

多いので、登録したメンバーどうしがお互いのフィールド調査のプロセスを見ながら、すすめることができる。また、当然のことながら、コンテンツとして提供されているタウン情報や地図なども活用できる。さらに、一連の誌等は公開されているので、他のユーザーとのつながりが育まれることもある。実際に、学生たちの書いた誌に対して、見知らぬサイト利用者からコメントが書き込まれたりすることもあった。ネットワークを介して育まれる人とのつながりは、「読者」を意識することの重要性を学ぶ機会にもなる。

これは、グループで登録して、既存のサービスを「私物化」するというのではない。いま、さまざまなかたちで提供されている地域ポータルやサービスを、知っているどうしで使えば、簡便なグループウェアになるということである。

3-3 情報の編纂およびレイアウト

今回は、フィールドワークの成果を、中吊り広告という紙媒体でまとめることにした。これまで、フィールドワークの成果は、文書や写真、映像などをもちいて報告することが多かったが、地域に暮らす人びとを主たる「読者」として想定した際、ひとつの方法として中吊り広告がふさわしいと考えたからである。

データの加工や編集に必要となる技術やスキルは、それほど高度なものではない。学生たちに求められたのは、もっぱら情報の編集・編纂能力だと言えるだろう。中吊り広告という形式に統一することで、平面的な表現にかぎられるが、ことば（コピー）の重要性や情報の付置（レイアウト）という側面が際立つことになる。学生たちは、3か月におよぶ調査の経験を、B3サイズ（364mm×515mm）の紙に凝縮するという作業に取り組み、一人が2枚～3枚（複数のデザインも可）を作成した。

3-4 評価と再構成（2007年6月21日）

一連のフィールド調査の仕組みづくりは、産学連携の一環として実現した。各自がデザインをすすめ、車両内での掲出開始の2週間ほど前に、デザインの講評会を開いた。共同研究先に全員で赴き、各自がフィールドワークの概要と中吊りのデザインを発表した。そこで、プロのコピーライターやデザイナーから、アドバイスやコメントをもらい、各自の作業をふり返るきっかけづくりになるような「場」づくりを試みた。

後述するが、産学連携という関係性については、事前に周到に調整をしておいた。つまり、プロ（＝この場合、研究費を負担している主体）のコメントは、あくまでも「もうひとつの可能性」であることを周知し、学生たちのアイデアやデザイン案は、極力尊重するように促した。同時に、いわゆる「アリバイ」づくりのように、形式的な報告会に終わらせることなく、企業、大学の双方が、共同でプロジェクトを運営することの意味を確認する「場」として講評会を位置づけた。学生たちは、アドバイス等を

ふまえてデザインを再構成し、最終版を仕上げた。

3-5 中吊り広告の掲出（2007年7月9日～20日）

「学外」において学ぶことの意味は、日頃、慣れ親しんだ「キャンパス」を離れ、地域を理解し、願わくば地域のためになるような活動を実践することである。われわれは、そのひとつの方法として、電車の車両を成果報告の「場」として考えてみた。つまり、フィールドワークの対象となった沿線に暮らし、毎日の「足」として、通学・通勤に、そして日々の移動手段に電車を利用する人びとこそが、われわれの報告書の主たる「読者」として想定したのである。最終的には33種類の中吊り広告が完成し、2007年7月9日～20日にかけて、江ノ電の車両内に掲出された。各車両に2枚ずつ、全28車両分のスペースを確保していたので、一部のデザインについては複数枚を印刷し、合計で56枚の調査報告書が、車内に並ぶこととなった。

実際に車内に掲出されると、他の広告のなかにごく自然にとけ込み、非常に興味ぶかい成果報告の「場」が生まれた。それぞれの中吊り広告には、固有の2次元バーコードを載せ、カメラ付きケータイと紙媒体とのコンタクトについても、併せて実験をおこなった。



図2 江ノ電車内に掲出されたフィールド調査の報告書（2007年7月）

4 考察：産学連携という関係性を再考する

まだ発展途上ではあるが、今回の試みに際して考察、試行したフィールド調査の設計は、大学と企業、大学と地域との関係性を再考するよいきっかけとなった。以下では、とくに産学連携という関係性のありようについて考察しておきたい。

すでに述べたように、「中吊りギャラリー」の試みは、企業との共同研究の一環として実施した。当然のことながら、企業と大学は、ことなる性質をもつ。

「中吊りギャラリー」というプロジェクトを実施する意義や、成果の公開等については、それぞれの要求水準をすり合わせておく必要があった。大学としては、とくに「学外」での実習を志向する場合には、研究費の獲得は急務であるものの、活動の内容や方法についてはできるかぎり自律性を確保しておきた

かった。企業としては、研究費を負担する以上は、相応のアウトプットを要求することになる。今回は、共同研究の意味・意義について、事前に入念な打ち合わせをくり返した。そのプロセスのなかで、産学連携におけるあたらしいパートナーシップのあり方を模索すること自体を、お互いの課題として検討するという問題意識を共有するにいたった。こうした調整作業を事前におこなったことで、ゆるやかな制約のもとで、フィールドワークの実習を実現することができた。今回の研究成果をなんらかのビジネスへと展開する際には、企業の営みとしてすすめればよいし、調査研究に関わる部分は、大学の研究室の領分だという理解である。それを前提に、双方で、なんらかの「地域貢献」の仕組みづくりを提案、試行することを目指してプロジェクトを推進した。

本論文で紹介した取り組みは、すぐさま一般化に結びつくものではないが、外部との連携において、どのような関係性を築くかが、調査のプロセス、ひいては成果のクオリティにも影響をおよぼしうる点にあらためて気づかせてくれた。

5 おわりに

江ノ電で実施した「中吊りギャラリー」の成果をふまえ、同様の運用モデルを想定しながら、さらに函館市（北海道）においてもフィールド調査を実施した。まず、調査対象となるエリアを函館市電沿線に定め、フィールドワークを計画した。調査期間や方法はことなるが、途中段階での講評会の開催、中吊り広告の作成など、江ノ電での試行と同じプロセスを経て、2007年11月19日～12月2日にかけて、函館市電の車両内に函館での調査結果を掲出した（詳細はウェブサイトを参照）。

「学外」に学習環境を設けるということは、安易に考えるべきではないことを、一連の実践をつうじて考えさせられた。重要だと思われるのは、フィールドワーカーの責任をもう一度問い直すという点である。また、「学外」での思考と実践があったからこそ、われわれになじみ深い「キャンパス」や「教室」が、じつに安全に、巧みに組織化されていることを再度確認できた。地域コミュニティで学ぶからには、その成果は地域に還されるべきであるし、継続性や活動の拡がりを想定したプログラム設計をおこなうことで、地域とのあたらしい関係性を醸成することが望ましい。「学外」での活動が、「キャンパス」での活動と相補的な関係に位置づけられるとき、われ

われは、「内」と「外」を行き来することをつうじて、「創発する学び」の機会に出会うはずである。

参考文献・資料

- ハイデン, D. (2002) 『場所の力：パブリックヒストリーとしての都市景観』 後藤春彦・篠田裕見・佐藤俊郎（訳）（学芸出版社）
- 加藤文俊（2006a）モバイル機器を活用した“まち歩き”のデザイン：「遊歩者」のためのメディアをつくる 「日本シミュレーション&ゲーミング学会全国大会論文報告集」（2006年秋号），pp. 127-130.
- 加藤文俊（2006b）「寅さんの見た風景を採集する：カメラ付きケータイをもちいたフィールドワークの試み」『現代風俗学研究』第12号（pp. 37-45） 社団法人 現代風俗研究会
- Kolb, D. (1984) *Experiential learning: Experience as the source of learning and development*. New Jersey: Prentice-Hall.
- リンチ, K. (2007) 『都市のイメージ 新装版』 丹下健三・富田玲子（訳）（岩波書店）
- Oldenburg, R. (1997) *The great good place: Cafes, coffee shops, bookstores, bars, hair salons, and other hangouts at the heart of a community*. New York: Marlowe & Company.

ウェブサイト

- 中吊りギャラリー（湘南編）（2007）
http://vanotica.net/enoden_gallery/
- 中吊りギャラリー（函館編）（2007）
<http://vanotica.net/hakop1/>
- 湘南 Clip：湘南密着型ポータル
<http://shonan-clip.jp/>

新聞記事など

- 湘南経済新聞（2007/7/14）「江ノ電車内で中吊りギャラリー、慶応大 SFC 学生が成果発表で」
<http://shonan.keizai.biz/headline/294/index.html>
- 函館新聞（2007/11/20）「函館の日常 学生の視点で 最古の市電 530 号 中づりで発表」
- 北海道新聞（2007/11/20）慶大研究室 市電車内に「ギャラリー」 函館の魅力「中吊り」に

※「中吊りギャラリー」は、株式会社電通ワンダーマンとの共同研究の一環として実施した。